
IS インフィニット・ストラトス 神天使と孤高の拳闘士

八神刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 神天使と孤高の拳闘士

【Nコード】

N0354V

【作者名】

八神刹那

【あらすじ】

天界との戦争から1年後。黒い球体に飲み込まれた柳瀬大護とフェルト・グレイスは新たな世界へ。そこはIS インフィニット・ストラトスと呼ばれる兵器が存在する世界だった。そこで新たに生きる決めた2人。だが、その世界には大護の宿敵がいるのであった。

プロローグ

3回世界が絶望に陥った世界。

その絶望から世界を救った世界最強の部隊“十三隊”。

彼らはここ最近奇妙な波動を発生している地点に調査にやって来た。

「全く。州軍は動かねえのか？」

利き腕である左腕を服の中で隠している侍風の格好の男 新庄 剛
が言った。

「しょうがないだろ。復興やら何やらで忙しいんだから」

ぱつと見れば女顔の男宮木 影義が新庄に言葉を返す。

「てか、集まったのは5人だけか。信は来れないのか？」

彼らの総隊長 橘 嵐が隣の白髪の青年に聞く。

「信は今日はアリアドネーで魔導教導中だ。まず、オレとフェルト
が見て来っから」

白髪の青年 柳瀬 大護が嵐に言う。

「てか、フェルト。お前、優と翔はどうした？」

嵐が大護のパートナー、フェルト・グレイスに聞く。

「麗奈と桜に見てもらっている。さすがに1年のブランクはマズイからな」

フェルトは嵐に言葉を返す。優と翔は大護とフェルト2人の双子の子供である。麗奈は嵐の妻で桜はその1人娘である。

「さてと、いきますか」

「ああ」

大護とフェルトが飛び立ち謎の波動の発生ポイントまで飛んで行く。その後を3人が追って行く。

「別にな変わったところはないぞ？本当にこのポイントなのか？」

大護が嵐に聞く。

「このあたりのはずなんだ・・・って！！大護！フェルト！前見る！！」嵐の怒鳴り声に2人が前を見るそこには黒い球体があった。

「引き寄せられる！？大護！」

大護はフェルトを抱きしめその空域から離れようとするが球体からの引力で空域から離れられない。

「こうなったら！！」

大護は自身の真の姿、神天使の紅と蒼の4枚の翼を広げるが、引力はさらに強まる。

「ダイゴーーーーー!!!フェルトーーーー!!!」

嵐の音が響く。

「嵐。優と翔を頼む」

突然、フェルトが言った。

「な!?何言ってるんだ!てめえの子ぐらいてめえで見ろ!!」

「悪い・・・無理そうだ」

大護の声。

「フェルト。すまないな・・・今回は・・・」

「言うな・・・わかっているから。でも、私は大護といれてうれし
いぞ」

フェルトが大護を抱きしめる。

「ありがとう」

大護も抱きしめなおす。

そして、2人の姿は黒い球体の中に消えた。

嵐が手を伸ばしたがそれは届くことはなかった。

その後も2人の搜索は続けられただが、見つからなかった。

後に2人の子供、柳瀬 優は世界最高の魔導士にその双子の弟 柳瀬 翔は父親に勝るとも劣らない世界最強の魔導戦士になった。

十三隊は何年もかけて2人を探したが2人は見つかることはなかった。

天界との戦争で吹石 凌を失い。その1年後に柳瀬 大護、フェルト・グレイスを失った十三隊。だが、残った5人はあの3人が願った平和な世界を築くのであった。

第1話 知らない世界（前書き）

束の性格がうまく書けない……。ご了承ください。

第1話 知らない世界

IS インフィニット・ストラトス。それは特殊パワードスーツであり従来の兵器を圧倒的に凌駕する物だった。だが、ISには欠点がある。それは女性にしか反応しない。そのせいで今日の社会は女尊男卑が当たり前前になっていた。

某国のとある島。

ここにはISを発明した希代の天才 篠之野 東の隠れ家がある。

「そっかあ〜。ちーちゃんもいつくんも元気かあ〜」

東はとある友人からの手紙を読み、彼女とその弟が元気なことに安心して笑顔になる。窓からぼんやりと空を眺めていると

「なにあれ？」

黒い球体のようなモノが見えた。しかも、そこらなにかが落ちて来る。

目を細めて見ると

「なーんだ、人かあ・・・って！人！？」

また見ると確かに人が落ちて来る。不思議なことにその1人から紅と蒼の翼が見える。

「って！それどころじゃない！！」

束が何かスイッチを押すと2人の落下地点に緊急救助用のマットが現れた。2人はそのマットに落下し何とか一命を取り留める。

「ん？なにあれ？」

落ちて来た2人を束はジロジロ見る。1人は赤桃色の少女でもう1人は白髪の青年。それはいいのだが青年の背中から紅と蒼の翼をはやしている。

「・・・天使？それにこれってISだよな」

束は青年の左腕のブレスレットと少女の指輪に目をやる。それらは彼女が発明したISの待機状態だった。勝手にそのデータを見る。

8

「フンフン・・・。こつちの男の子は柳瀬大護、女の子はフェルト・グレイス。ISは雷帝とクアンタ。これは束さんの作ったISじゃないよね」

束はそんなことを考えながら2人のISのスペックを見る。

「何これ！？雷帝は超高速機動型でクアンタは近接戦闘を中心の機体。しかも雷帝はつねに高速機動状態。武装は雷帝は二本の刀だけ“雷龍丸”と黒刀“戦刀”^{いくたな}・・・両方とも普通の刀だねえ。クアンタはGNガンブレイド2本、GNシールド、ソードビット。しかもほとんどがビーム兵器。なにこれ、ほとんどオーバーテクノロジー！！？ん？雷帝は魔法攻撃可能？・・・魔法？」

束の思考が止まる。

「ウーン・・・あんまり人とは関わりたくないけど・・・この魔法
って・・・ウーン・・・」

束は悩んだ末に2人をベッドに運ぶことにした。

「ん？ここは・・・？」

大護が目を覚まし周りを確認する。

「確か、球体の引力に巻き込まれて・・・フェルトは横で寝てる・・・」

大護はフェルトの無事に安堵する。

「起きたんだ」

突然の声に入って来た人物を見る。格好は1人で不思議の国のアリスをしている格好だった。

「・・・・・・・・・・」

あまりにも変な格好のため言葉を失う大護。

「君が柳瀬 大護くんだね？」

「ああ。二二二は？」

「ここは私、篠之ノ 束さんの隠れ家だよ。あと、君のつけていたISを見せてもらったから」

「IS？」

「やっぱり、別世界の人間、いや、君の場合は天使って言ったほうがいいね」

「!?!なぜ、オレが天使だと・・・」

身構える大護。

「君とそっちで寝てる子が落ちてきたとき、君の背中に天使の羽が生えていたんだよ。これ証拠写真ね」

と言って束が写真を見せる。確かに大護の背中に天使の翼が生えている。

「・・・つまりここはオレ達のいた世界とは別の世界ってことか・・・」

「そういうこと。あと、君のISに入ってる君たちの過去を見させてもらったよ。かなり、すごい人生を歩いて来たねえ・・・」

「・・・人の過去を見るのはどうだと思っが・・・それより、ISってなんだ？」

大護の質問に束は簡単に話し始めた。自分がISを作ったこと、白騎士事件、女尊男卑の世界のことなどを。

「なるほど……。で、オレたちはどうなる？」

「束さんはあんまり人と関わりたくないけど。君の使う魔法には興味津々だよ。それにいろいろ協力して欲しいんだ。どう？」

「確かに悪い条件じゃないな……。いいだろう。その条件乗っかってよ」

それからしばらくして、フェルトが目を覚まし、この世界のことを話した。

「つまり、ここは別世界ということか」

「簡単に言えばな」

「それに、私たちの世界同様にいつ戦争が起きてもおかしくないし……。それで、大護は束さんの「条件を飲んだと言ったことか」

「ああ。この世界のことについて、オレたちは知らなすぎる……。それに……」

「できれば、戦争を止めたいか……。大護らしくて良いんじゃないか？私はお前についていくと決めただからな」

フェルトが微笑む。

「ありがとう。でも、お前に、尻尾と耳がないのはなんか嫌だな・・・」

フェルトは元の世界では獣人とヒューマンのハーフにあたる種族“ビーストクォーター”だったために本来なら猫耳と尻尾があるはずなのだがそれがない。大護はそれが残念だと思っている。

「別に良いか・・・どんな姿でもフェルトはフェルトだからな」

「ありがとう・・・そろそろ寝るか・・・」

「ああ」

そう言って2人は眠りについた。

2人が束と生活をはじめて半年になった。そんなある日。

「で、親友の弟がなんか知らないがISえお起動させちまったからオレたちに護衛してくれと・・・」

「そして、そのためにIS学園に入学しろと・・・束の言うことにはもう慣れたが、それはさすがにまずいんじゃないか？私たち、年はもう22歳だぞ」

2人の年齢は本当は22歳。高校に入学する年齢ではない。だが、

束が

「大丈夫、ダイジヨブ！大くんのこと、公にしたら、OKが出たから！それに、いっくんを狙って面倒なのが動くでしょ？2人の強さなら大丈夫だから・・・」

束が珍しくシリアスな表情になる。そして、いつしか2人のことを大くん、フェーちゃんと呼ぶようになっていた。

「まあ、良いか・・・あつちじゃ高校にあんまり行ってなかったし。それに、運が良かったら元の世界に帰れるかもしれないからな」

「そっか。2人には子供いたんだよね。じゃあ、お願いね。あと、フェーちゃんは専用機持つてるけど、オペレーターで入学してもらうね」

大護のISのデータはこの世界の技術では取れないほどのスペックや能力があるが、フェルトのISはこの世界のデータに基づいたスペック、能力を持っているため。このデータを束はもうしばらく研究したいからフェルトをオペレーターとして入学させるのだ。

「わかった。あまり、目立たないようにしとく」

「じゃあ、お願いね・・・あと、篝ちゃんのこともよろしく！！
あとのことはちーちゃんに聞いてね！！」

こうして2人はIS学園に入学することになった。そして、これが

新たな戦いの幕開けとなった。

第2話 IS学園

IS学園。1年1組。

このクラスで目立つ存在が2人いる。

1人は入試の時に勝手にISを機動させてしまい半ば強制的にIS学園に入学することになった。織斑 一夏。

もう1人は1ヶ月前に篠之野東により公にされた2人目の男としてのIS操縦者 柳瀬大護。

(女子高つて聞いてたけどここまですごいは・・・)

大護は周りからの視線に弱冠たじろいでいた。一夏もどうようである。

「織斑くん！織斑一夏くん！！」

「え？あつ！ハイ！」

副担任 山田 真耶の声で吾にかえる一夏。声が少し裏返ったためクスクスと笑い声が聞こえる。

「お、大声だしてゴメンね！お、起こってるかな？ゴメンね。でも、今自己紹介してもらって『あ』から始まって今『お』の順番なんだよね。自己紹介してくれるかな？」

ほとんど謝り口調で一夏に頼む真耶。

「い、いや。そんなに言わなくても自己紹介しますから・・・」

「ほ、ホントですか？約束ですよ！」

「えっと・・・織斑一夏です。よろしくお願いします・・・」

一夏がそれだけ言うとクラス内の女子の目が変な輝きを見せた。

(いかん！ここで黙ったら、暗い奴というレッテルを張られてしま
う！)

一夏は深呼吸し

「以上です！」

言い切った。

ガタタ！

数人の女子が机からずり落ちた。流石の大護とフェルトもあの答え
にこけてしまった。

スパーン！！

一夏の頭に鋭い一撃が当たった。

「げ！関羽！！」

スパーン！！

再び脳天に一撃。

「誰が三国志の英雄だ。馬鹿者！」

現れたのは黒のタイトスカートに身を包んだ担任の織斑千冬である。

(この人が・・・)

大護は束から千冬の大まかなことは聞いていた。第一回目のモンド・グロツソの優勝者であり、最初のIS“白騎士”の操縦者としか聞いていないがかなりの実力者とはわかる。

「諸君。私が担任の織斑千冬だ。これから君達を1年間で使い物にするのが仕事だ。私の言うことはちゃんと理解しろ。いいな」

軍隊の教官のような言い方である。

「キヤーーーーー!!千冬様よ!!!本物の千冬様よ!!!」

クラス内をソニックウェーブが襲った。

(窓ガラスが割れそうだ・・・ここまでの音量だせるか?普通・・・)

大護とフェルトは耳を塞いでいた。この音量は下手したら鼓膜が破れかねない音量である。

「あれ?織斑先生。吹石先生はどちらに?」

真耶が聞く。

「少し遅れて来ると・・・」

とその時、教室のドアが開き入って来たのは

「ゴメンゴメン！遅れちゃった！」

程よく伸びた美しい銀髪になぜか侍のような格好、だが、モデルかおまけの体をした女性が入って来た。その人物を見た瞬間、大護とフェルトの視線は彼女に向けられた。

「1年1組のもう1人の担任の吹石 凌よ！よろしく!!」

（何で凌が！？あいつは確か・・・）

（話は放課後ね 大護、フェルト）

大護とフェルトの頭に突然の念話。2人はその言葉に従うことにした。

自己紹介の順番がフェルトに回ってきた。

「フェルト・グレイスだ。歳は22でこの学園ではオペレーターとして学ぶことになっている。よろしく」

最後に大護の順番になった。

「柳瀬大護。フェルトと同じ22歳だけど年齢を気にしないで接し

てくれ。よろしく」

自己紹介を終えた瞬間再びクラス内をソニックウェーブが襲った。大護は整った顔に銀に近い白髪、誰がどう見てもかなりカッコイイ部類の男子に入るから当然の反応である。

休み時間になり大護とフェルトが話をしていると

「よつ。柳瀬とグレイスだっけ？俺は織斑一夏。同じ男同士よろしくな」

「ああ。あと、オレのことは大護でいいぞ。それに敬語もなしな」

「そうか。じゃああらためてよろしくな。・・・えつと・・・こつちは・・・」

一夏はフェルトを見て名前を思いだそうとする。

「フェルト・グレイスだ。フェルトで構わない。よろしく」

「おう。2人とも年同じなんだよな？どんな関係なんだ？」

「どんな関係って・・・恋人同士かな？」

実際は結婚していて子持ちだが、それを今ここで言う訳にもいかずとりあえずそう答える大護。「マジで！？俺の周りにそういうやついないからちよっと新鮮だな・・・」

「ちょっといいか？」

3人の間に入って来たのは束の自慢の妹篠之野 箒だった。

「柳瀬、 그레이ス。 ちょっと一夏を借りるぞ」

「いいぞ」

「じゅっくり」

2人とも即答する。フェルトは一夏に対する箒の気持ちをいち早く読んでいて敢えてあの言葉を選んだ。

(まるであの時の私と大護のようだな・・・)

フェルトは6年前の自分と箒を重ねていた。

「柳瀬。 그레이ス。 いるか？ ちょっと職員室まで来い」

織斑先生から突然の呼び出し。2人は職員室へ向かった。

案内されたのは生徒指導室。中には千冬と凌が待っていた。

「ここなら盗み聞きをされる心配はないからな」

「で、用件は？オレたちの事は束から聞いてるんでしょ？」

大護は敬語は苦手だがここでは立場的には先生と生徒。敬語を使う。

「ああ。お前たちが別世界の人間という事と柳瀬が天使という事はな。用件、とうか頼み事なんだが・・・一夏の事をよろしく頼む」

千冬が頭を下げようとしたら隣にいた凌がそれを止めた。

「凌!？」

「大丈夫。この2人はそんな事しなくても一夏のことを護るからね?大護?」

凌が言う。3人は同じ世界で一緒に戦った戦友であり半分家族みたくでもある考えてる事くらいすぐわかる。

「ああ。一夏とはもう友達だからな。護るのは当然だ」

「だから、心配するのは凌の行動だけだな」

大護とフェルトが言う。

「何よ!?!私の行動って!?!まっいいか。放課後、話聞かせてね。あの子の事とか」

「わかった。話す事はあまりないがな」

休み時間が終わり2時間目。ISの基本授業。

「ここまでで何かわからない事はありますか？」

山田先生の声に1人手を挙げる男子生徒。織斑一夏である。

「何ですか？織斑くん」

山田先生が意気揚々と聞く。

「ぜ、全然わかりません・・・」

半泣きの一夏。

「え！？全く全然、これっぽっちもですか!？」

「ハイ・・・全く全然、これっぽっちも・・・」

「織斑。お前、入学前に配ってあった参考書は読んだか？」

織斑先生が聞く。

「あの分厚いやつですか？古い電話帳と間違えて捨てちゃいました・・・」

その瞬間、一夏に再び出席簿の一撃が加わった。

「必読と書いてあったたる馬鹿者が！再発行してやるから1週間で

覚える」

「いや！それはちよっと・・・」

一夏が反論しようとしたが

「やれと言っている」

千冬の眼が鋭く光った。

「はい・・・」

一夏の今の心境は蛇に睨まれたなんたらである。

「柳瀬。織斑に基礎を叩き込んでやれ。同じ男同士なら教えやすいだろ」

千冬の言葉に大護は黙って頷いた。それを見ていた凌は必死に笑いを堪えていた。

休み時間。

「悪いな大護・・・」

「別に構わない。放課後とりあえずオレの部屋に來い。オレはあまり教えるのは得意じゃないからとりあえず参考書は一回軽くは読んで来いよ」

「わかった。恩に着る」

放課後。

一夏に講義を終えた大護は凌に元の世界のことを簡単にだが話した。

「へえ〜影義がオスティアの騎士団の総責任者に・・・大丈夫なの？」

「多分な・・・いろいろ不安要素はあるが大丈夫だろ？」

大護と凌が談笑しているとシャワーを終えたフェルトが出て来た。

「シャワー開いたぞ。早く済ませて寝よう」

まだ10時半なのに寝る気のないフェルト。久しぶりの学校生活で疲れたからだろう。

「じゃあ。私は帰るね。明日はモデルの仕事で午後はいないから」

凌はこの世界に来てからモデルと歌手の仕事もしている。世間ではかなり有名なIS操縦者と一流のアイドルとして名が知られているらしい。

部屋を出る時

「あまり淫行はしないでね」

と言っ て来た。

「「しないよ!」」

顔を真つ赤にして否定する2人。だが、子供がいる以上やらないかもしれないが凌はこの2人の性格をよく知っており

(絶対やる!)

と確信しているのである。

こうして2人のIS学園初日は終わった。2人は今度は楽しくて普通の学園生活を送れるのを願って眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0354v/>

IS インフィニット・ストラトス 神天使と孤高の拳闘士

2011年10月7日15時47分発行